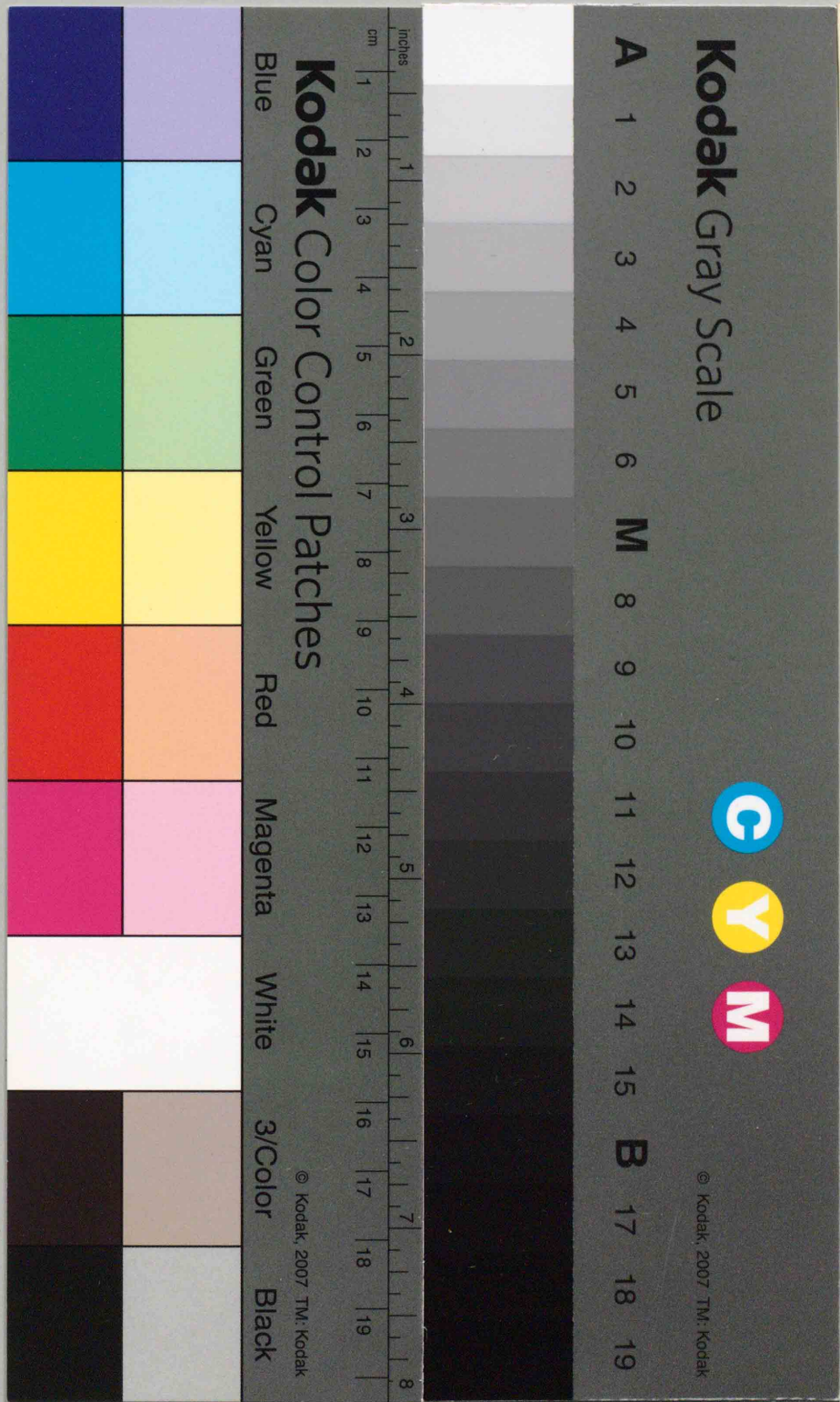
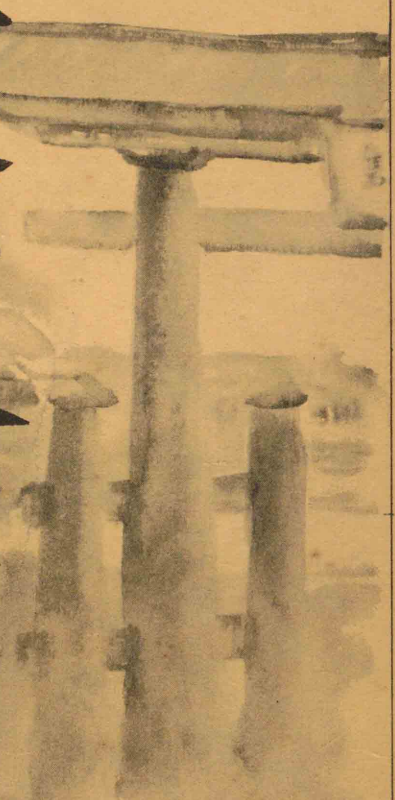


教科書文庫
4
291
30-1935
2000302825

郷土讀本 下卷

廣島縣教育會



43259

教科書文庫

4
291
30-1935
20003 02825



教科書文庫

4

291

30-1935

2000302825



郷土讀本 下卷

廣島縣教育會

広島大学図書

2000302825



資料室
中央図書館

395.9
Hi18



第十三	移民王國廣島縣	三
第十二	阿部正弘	三
第十一	人造絹絲	六
第十	廣島縣の陸上交通	五
第九	唐崎赤齋	三
第八	片山病	〇
第七	廣島縣の氣候	八
第六	浮鯛	六
第五	水野勝成	三
第四	大長水産試験場	三
第三	海上の公園瀬戸内海	〇
第二	發電所	六
第一	廣島の史蹟巡り	一

目次

一



廣島大學
圖書印



廣島縣教育會

第十四	工業試験場	三
第十五	藩校	三
第十六	島めぐる航路	三
第十七	茶山と山陽	三
第十八	なめくぼうを	四
第十九	宇都宮黙霖	五
第二十	山地に於ける人々の生活	五
第二十一	辻將曹	五
第二十二	浅野長勳侯	五
第二十三	いかり漁業	六
第二十四	縣民性	六

附録

廣島縣地圖

郷土史年表



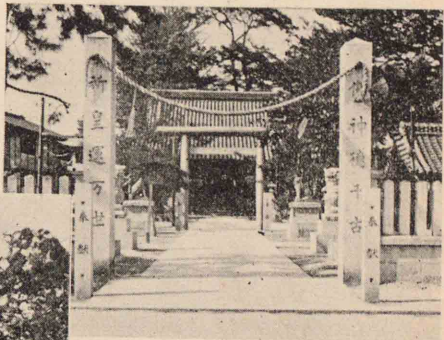
郷土讀本下卷

第一 廣島の史蹟巡り

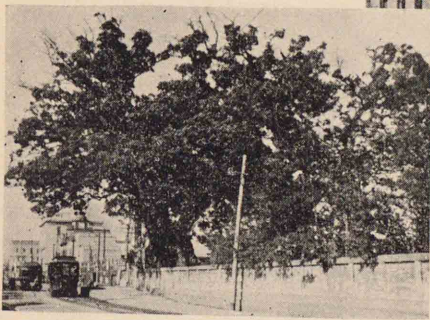
現在にはなほ多くの氏神が出來てゐる

白神社は廣島市の氏神様で、菊理姫命をお祀り申してある。もと、廣島城下の總氏神であつたが、後に東部は鶴羽根神社西部は空鞆神社に屬したため、中部の氏神となつたものである。

昔はこの邊は海中の岩礁であつて、通航のさまたげとなること甚しく、そのため度々事故が起きた。それで岩の上に白い紙をつけたものを立て、航路の安全を圖つてゐたが、凡そ四百年前、大友時盛といふ人が岩上にお宮を建て、白い紙の由來から白神社と稱へたと傳へられてゐる。今も正殿は巨巖の上に在るのだが、様子



國泰寺の樟



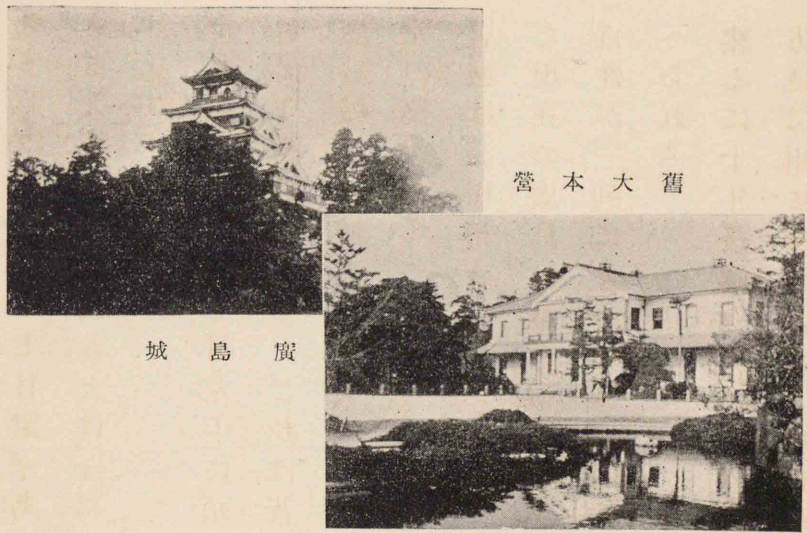
白神社

が次第に變つたため一目でそれとわかりにくくなつてゐる。後約六十年、廣島城主毛利輝元は新しく本社を建立し、福島、淺野時代にそれ／＼修築せられて今日に及んでゐる。

白神社から電車道に沿うて北に進むと大きな樟木が通をおほつて黒々と茂つてゐるのが目につく。これが國泰寺の樟木といはれる三百幾十年の年月を経た有名な大木である。木は四株あつて、高さは二十米乃至三十米で、太

さは五六人の大人でやつと取りまかれる程である。樟木としてこれ程大きく立派なものは縣下にも珍らしく、天然記念物に指定せられてゐる。

國泰寺は樟木で知られてゐるばかりでなく、境内には赤穂義士で名高い大石家の墓があり、第一回長州征伐の時には長州の三家老の首實檢の行はれた所でもある。また北に進んで「止れ、進め」の合圖で本通を横切つて行くと、西練兵場に出る。その北隅の道から入り、古めかしい城門をくゞるとやがて舊大本營跡に到る。これこそ全國に數百とある 明治大帝の御聖蹟の中でも、二つとない尊い歴史的記念物であり、朝な夕なに仰ぎ奉る生きた教である。明治二十七八年戦役は、實に我が國運を堵した一大國難であつた。明治天皇はかしこくも二十七年八月、清國に對して宣戰の詔を發せられ、九月十五日大轟を廣島に進め、舊廣島城内の第五師團司令



舊大本營

廣島城

部に大本營を置かせられた。それより八ヶ月の間、狭い大本營内に御起居ましまし、海陸の軍をお統べになり、一日として安んじ給ふことはなかつた。寒中にも御火鉢は僅かに一箇、御座所の御室は御會議所にもなり、御寢室にもあそばされたことを聞き、當時御使用になつた竹の御衣桁、質素な御湯殿、御調度品を拜觀すれば、かしこさ有難さに自ら目頭が熱くなる。

翌年四月二十一日、平和克復の詔

を下し給ひ、同二十七日還幸あらせられたが、我が國が世界を驚かせる大勝利を得たことは、一に申すもおそれ多い大御心、御稜威りやうゐによるのである。

大本營跡を拜して斜左手に頭を廻らすと杉の老木の間にそびえる天守閣が見える。これは昔の廣島城の形見である。

廣島城は鯉城りぎやうの名で天下に聞え、今を去る三百五十年前に、毛利輝元の築いたものである。輝元は百二十萬石を領してゐたが、その居城は高田郡吉田にあつて、不便であつたため當時五箇庄といつた現在の廣島の地に城を移した。吉田から廣島まで十一里の間、百姓が一列に並んで少しも歩かず手から手に荷物を運んだと傳へられる。

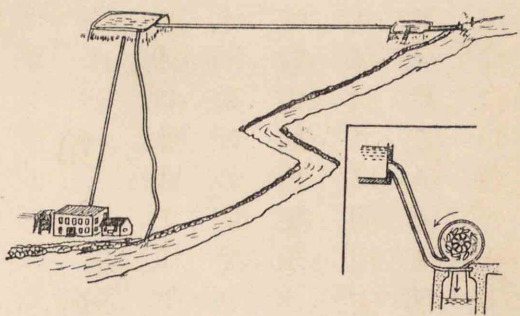
然るに十年後關ヶ原の戦に及んで、輝元は石田方に味方して敗れ、防長二州に移された。次に福島正則が封ぜられたが十九年の後

幕府に無斷で城を修築したため、罰せられて信濃に移され、淺野長
 辰が城主となつた。それから十二代明治維新の頃まで續いた。
 明治六年鎮臺が置かれ城内に司令部を設けられて今日に至つた
 のである。

第二 發電所

電氣の發見されたのはずるぶる大昔のことであるが、實用に供せ
 られるやうになつたのは、八十數年前電信が公衆用になつた頃か
 らのことである。

我が國では明治十九年の暮東京市に電燈がつけられ、明治二十四
 年京都で琵琶湖の水を利用して水力電氣を起した。明治四十年
 には全戸數の約二パーセントしか點燈しなかつたが、昭和三年に



水力發電說明圖

は九十パーセントに達し、今日では世界第
 一の普及率を示してゐる。

廣島縣に於ける電氣事業は廣島電燈株式
 會社が、廣島市大手町に火力發電所を設け、
 明治二十七年廣島市に最初の點燈をした
 のに始まる。

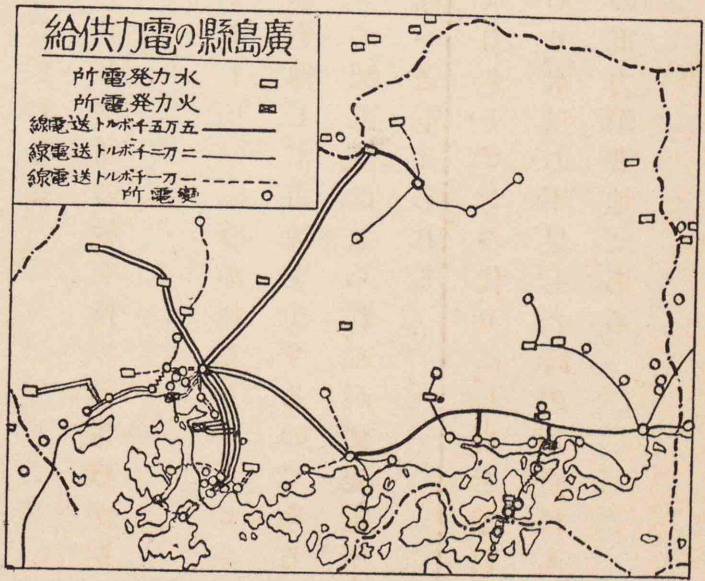
當時の點燈數は僅かに七百十三に過ぎな
 かつた。その後長足の發達をして、現在で
 は電燈はいふまでもなく工場に於ける電動機、其の他の電氣裝置
 に使用されてゐる電力は、まことにおびたゞしいものである。

これ等の電力の九十五パーセントは、廣島電氣株式會社の供給に
 よるものであり、現在十二の水力發電所と、三つの火力發電所がそ
 のために設けられてゐる。

水力發電所は、落下する水力を利用して電力を得る所である。

落下さす水は川上を堰き止めて引けばよい。その爲にコンクリート作りの堰堤が設けられる。堰堤に堰かれた水は水路の入口にある整水門の扉の開き加減によつて、發電所の要求通りに送られる。

整水門を入ると間もなく沈砂池がある。土砂の大部分は沈澱する。こゝから長い大きなコンクリートの水路管によつて、發電所



廣島縣電力供給圖

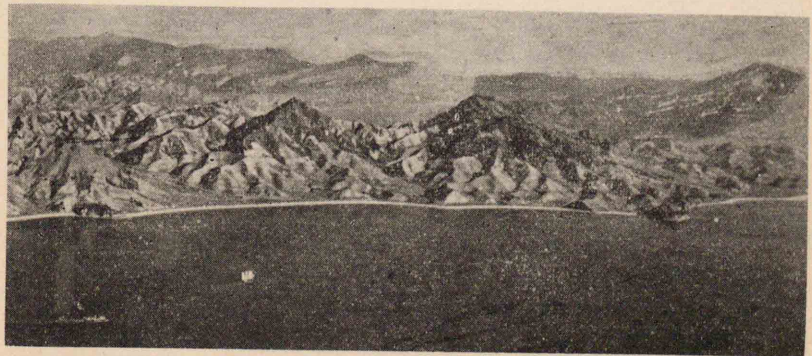
背後の山腹にある水槽に送られるのである。水槽はかなり大きなもので、多量の水を溜めておき、水位をなるべく一定に保たせて必要の水を發電所へ送るやうにしてある。發電所の室内には水力タービンと共通の軸を持つ發電機が据ゑつけてある。

水槽の水が水壓鐵管によつて、タービンに導かれるとタービンは勢よく廻轉し、従つて發電機は廻轉して電流を生ずるのである。その電流は三本の導線によつて配電盤に送られ、やがて變電所變壓器を経て家々や工場其の他へ送電せられる。

火力發電所は、水力發電所の水力タービンの代りに、石炭を燃料とする蒸氣タービンを用ひてあり、水量の不足した時の用意にもなる。廣島縣は實に中國第一の電力消費地である。

第三 海上の公園 瀬戸内海

瀬戸内海は海上の公園として世界に名高い。その中でも鞆から尾道糸崎忠海竹原長濱廣島を経て嚴島に至る船路には、大小の島々が散在して田園もよく開け、船の進むにつれて、變轉極りなき妙趣を展開して行く。春風をはらんで白帆が霞の中に消えて行く頃には、島山は桃や杏あんずの花に飾られ、潮の香と共に花の香が内海にただよふ。やがて初夏が訪れると、段々島の麥が

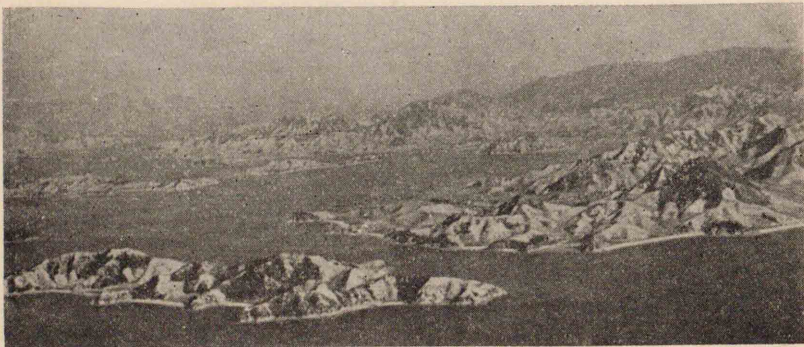


瀬戸

黄色にみのり、除蟲菊も眞白く咲き揃ふ中を緑の桑畑が點綴てんていするので、美しい縞模様が織り出される。

夕立がさつと通り過ぎた濱邊に、塩やく煙がゆらくと白く立ち上るのはすがくしく、又月影くだけの波間に、漁火の出沒する夜景も面白い。

秋も更けると熟しきつた蜜柑は濃緑の山を彩り、全山小春日和に照り映えて、その影を静かに瀬戸にうつす風情は、えも言はれない。げに瀬戸内海の風光は繪のやうである。



内海

第四 大長水産試験場

豊田郡大長村には、農林省の水産試験場の分場がある。これは大正十年に設けられたもので、主として海産魚類並びに板甫牡蠣の養殖試験研究を行つてゐる。

この試験場のある大崎下島は、本土から遠く離れてゐるので、海水の温度や比重の變化が極めて少い上に、水もよくすみ、魚類の研究には大そう便利である。

建物はすべて木造平屋で、事務室、實驗室、孵化室等がある。前面には、總面積四千坪もある池があつて之を大小十一に區切り、各種の魚類を養殖してゐる。又その他にもたくさんの小實驗池があつて、これに附屬した貯水タンクには、毎時二萬立の海水を吸ひこむことの出来る電力ポンプがある。別に淡水の貯水タンクもあつ

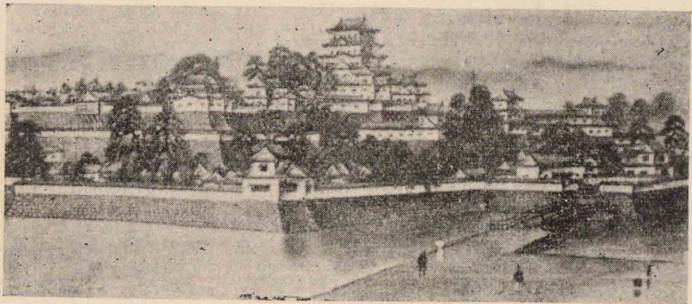
て、これ等のタンクから海水淡水を自由に各實驗池に送ることが出来る。大養魚池では難しい特殊の研究をも行ふことが出来るのである。これまで海産魚類の養殖は、極めて困難なものとしてあまり研究されてゐなかつたが、こゝでは熱心に研究した結果、我が國でも最初の鯛の人工孵化放流にも成功するやうになつた。板甫牡蠣は塩分の多い所にも棲むので、どこにでも養殖し得られるから將來有望である。唯その種苗は人工的にたやすく採られな

い缺點があるが、現在ではこの採苗の方法を研究しつゝあるので成功の期も遠くはあるまい。

第五 水野勝成

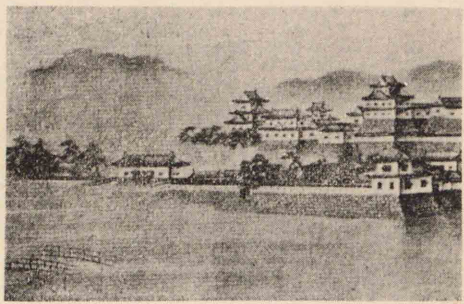
鬼と呼ばれた日向守は福山開祖と祭る神

水野日向守勝成は福山の基を開いた人である。勝成が備後神邊



元福山城

城主になつたのは、今から三百餘年前であるが、其の後種々の事情から福山に移つた。其の築城の際には彼の勝れた築城術はよくあらはされて、丈夫なあすなろを用材とし、外見内容共に天下の名城として名高い久松城を築いた。また城下の發展するやうに工夫して上水道を設けた。當時は江戸の神田上水道があつたゞけである。それから三百年、福山の人は此の上水道のおかげを受けて來たのである。又、交通の便を計る爲に、八風路、奈良津の二街道を設けて山陽道と連絡させ、入江を掘つて船の出



全景圖

勇ましく征途についた。果して勝成參加の後亂は平いだ。人々は軛街道に左義長を連れて彼を迎へた。

とんどくと吉津のとんど

上は鶴龜五葉の松

福山名物とんど囃子は此の時起つたと言はれてゐる。

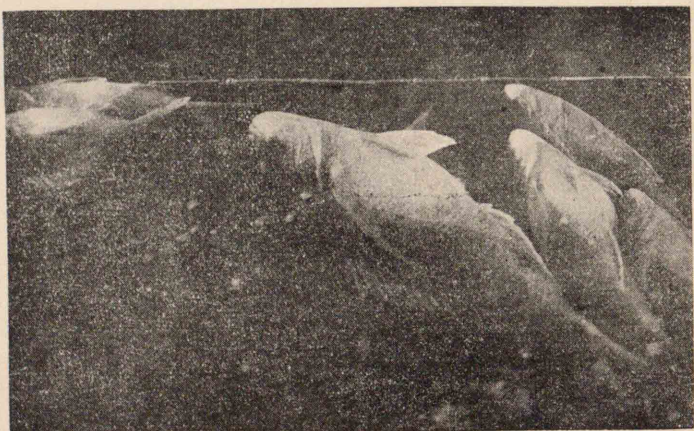
従つて領内はよく治つて、水野五代の間は一揆などはなかつた。勝成逝去して二百八十餘年、城下は勿論、領内一圓が今日の開化を見たのは彼の力によることが大である。

第六 浮 鯛

幸崎町能地の地先、三原瀬戸の渦潮巻く急流の中で、神功皇后が御船に集る鯛に酒をそゞぎ給ふと、鯛は忽ち酔つて皆浮び上つたといふ傳説がある。これは傳説に過ぎないが、浮鯛を漁夫が漁獲したのはかなり古い時代からのことであつた。大三島の北を東に向ふ急速な潮流は、大久野島のため二つに分かれ、一は能地堆から流れ落ち、一はこの堆につきあたつて湧き上り、ここで互に混亂して大小の渦をまいてゐる。八十八夜前の大潮

の頃、渦巻く急流に白い腹部をあらはした浮鯛が一つ二つと流れてゐるが、浮び出た鯛を見ると、その腹部が著しくふくれてゐる。潮の下流に待ちまうけた漁夫達は、一匹ものがすまいと海面を見守りながら、たくみに近よつてすくひ上げる。その手練の鮮かさは、人間業とも思はれない。一度のがすと忽ち魚は躍つて海中深く入り、再び姿を現はさない。

浮鯛はどうして起るのであらうか。魚類の鰾には、氣管によつて咽頭に開口するものと開口しないも



鯛 浮

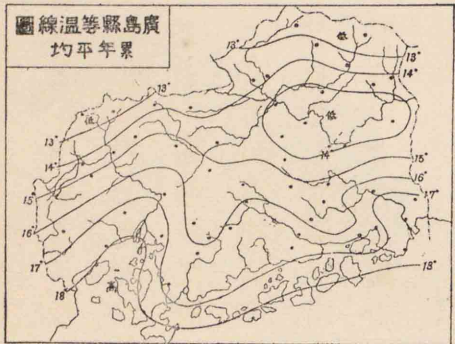
のとの二種あるが、前者は、其の中に含んでゐるガスを外部にもらすことが出来るが、後者は出来ない。鯛は後者に屬すから水壓の急變化に對し鰾のガスを調節することが出来ない。たま〜産卵のために、三原瀬戸にはいつた鯛の一部は、二十尋以上の深所から能地堆上に達すると水壓の急變化にあひ鰾が膨大し、浮鯛として浮び出るのである。これは地形と潮流の關係や鯛の習性によつて起るとはいへ、他に類のない面白い現象である。

第七 廣島縣の氣候

我が廣島縣の氣候は概して溫暖で、全國中最も恵まれた地方といひ得るが、土地の事情によつて多少の相違がある。海岸地方や島嶼部地方は夏は涼しい海風が吹き、冬も霜を見るやうなことは少

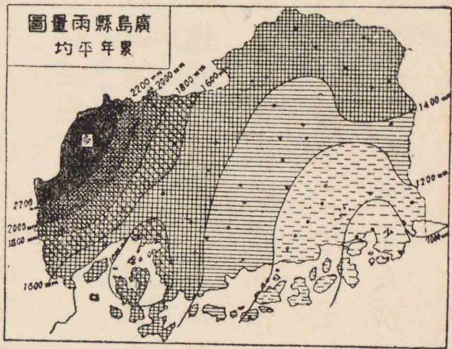
くて、二毛作が廣く行はれ、沿岸部一帯及び島々に柑橘除蟲菊等のよくできるのもそのためである。

しかし中央部から北方へかけては、土地が高いため冬季は寒さが厳しく、十一月頃には既に霜を見ることが多い。縣境附近の地方では積雪一二米にも達して川も道路も埋められ交通が杜絶することさへある。そのため吾妻山・金尾



廣島縣等溫線圖

原八幡高原のやうに近年スキー場として有名になつてゐる所もある。縣内の雨量は一般に北西に行く程多くなつてゐる。これは日本海方面の影響を受けることが、西に行くにつれて多くなるためである。快晴日数の多いことも瀬戸内海方面の氣候の特色



廣島縣雨量圖

この地方の人はこれを霧の海と呼んでゐる。

第八片山病

寄生蟲によつて起る病氣は種々あるが、ある地方にのみ限つて發

生する不思議なものがある。本縣に於てもその一として、福山市の北方四軒餘片山といふ地方に發生する片山病といふのがそれである。

この病氣は、日本住血吸蟲といふ人體寄生蟲の寄生によつて起るもので、本縣の外、山梨縣、佐賀縣、静岡縣等の一部にも見られる。

そもく、日本住血吸蟲は如何なる經路をとつて人體に寄生するものであらうか。

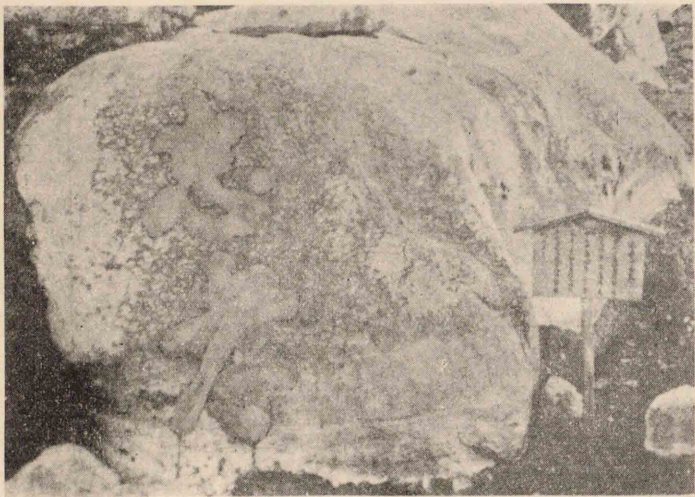
人の體から排出された此の卵が、種々の經路を経て水中に入ると孵化して纖毛をもつ幼蟲となる。この幼蟲は纖毛によつて運動をはじめ、いつの間にか、かはになに似た宮入貝の體内に入る。體内では纖毛を失つて尾をもつ尾蟲となり、水中に出ておよぎ廻る。この時たまくと、人が水中に手足を入れると、尾蟲はこれにふれて終に皮膚を通つて人の體内に入る。するとかぶれが出來て甚だ

しくかゆみを感じるのである。
皮膚の中に入った尾蟲は毛細管に入り複雑な経路を通つて終に肝臓に達し、こゝで發育するのである。永く寄生してゐる中に肝臓や脾臓を侵し、ひいては身體の發育を害し、生命を奪ふに至ることさへもある。

かくの如く恐るべき寄生蟲は、常に注意してその撲滅を計らねばならぬ。幸にも水中にゐる尾蟲は、石灰によつてその大部分を驅除し得るのである。更に興味あることは、螢の幼蟲が宮入貝を好んで食ふことである。故に石灰を撒くことゝ、螢をみだりに捕へないことはこれが豫防として必要なことである。

第九 唐崎赤齋

唐崎赤齋は高山彦九郎と相並んで、皇室の御衰微を慨き、幕府の專



忠 孝 石

横を憤つて、大いに尊王憂國の精神を鼓吹した人である。
父は信通といひ、家は代々藝州竹原の磯宮八幡宮の神職を勤め、尊王論のさきかけをなした山崎闇齋の學派を受けついでゐた。赤齋は少時から好學の念が強く、十五歳の時遠く伊勢に行き、當時崎門學派の中でも名高い谷川淡齋に師事し、刻苦精勵七年の後郷里に歸つた。
やがて父祖の業を繼いで磯宮

の神職となり益々神道を研究し、かたはら子弟を集めて皇室の尊嚴を唱へた。言一度その御衰微に及ぶと涙を流してなげき、子弟をして皆感奮興起せしめたといふことである。

赤齋、かつて高山彦九郎が己と志を同じうするを聞き、是非これと相會し共に國事を談じ、全國にわたつて同志を集め、尊王愛國の氣風を高めようと京都に上つた。一日たま／＼聖護院法親王の邸に於て、彦九郎と出會ひ、互に時世を慨き相擁して泣いた。其の後二人の交は極めて厚く、常に文通して互に激勵してゐた。

赤齋は常に己が家學の師闇齋を慕ふこと最も深く、闇齋没してまさに百年、その偉大な徳をしのぶ碑さへないのを残念に思ひ、かつて曾祖父定信が闇齋からもらつた文天祥の忠孝の二大文字を磯宮境内の千引巖に刻みつけた。忠孝の精神こそ赤齋の全精神であり、これを刻みつけることによつて、闇齋の徳を千古に傳へ、郷黨

に對する訓としたのである。

かくて終始至誠を以て王事に奔走した赤齋は、彦九郎が久留米に於て自害した後、志の成り難いのを憂へて、寛政八年十一月十八日正氣の歌を高らかに吟じながら自ら又に伏した。

けれども赤齋の壯圖は遺された訓と忠孝碑とによつて受けつがれ、幾多の人材が輩出するに至つた。これによつて藝南の一角は、忠孝の氣風大いにみなぎり、尊王憂國の志氣益々奮ひ、遂に維新回天の大事業成就の一大根源をなすに至つたのである。

第十 廣島縣の陸上交通

上古、この地方の交通路としては、文化の開けてゐた出雲地方から瀬戸内海方面へ出る出雲路があつて、それには中國山脈を越えて

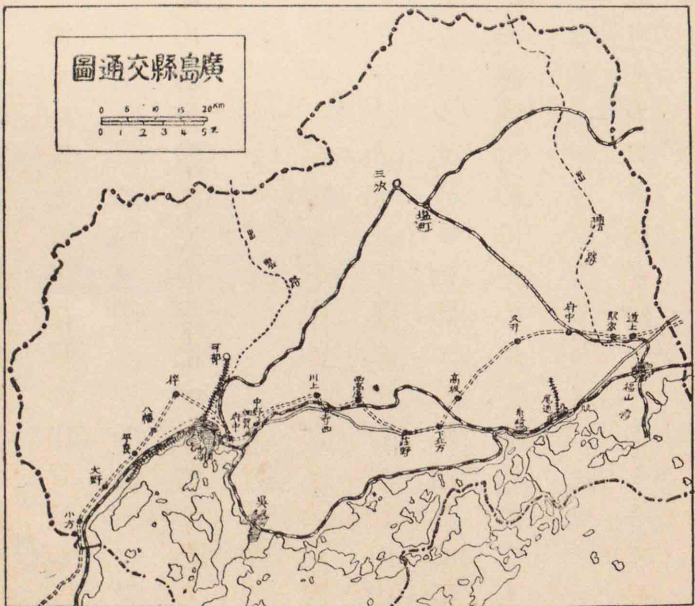
蘆田川に沿うて下るものと、江川の川口から可愛川溪谷を経て、太田川の下流に出るものがあつたといはれてゐる。神武天皇の御東征頃から、沿岸海路の交通も頻繁となり後世の山陽道が開通するやうになつた。

大寶の頃、驛制を布かれた時、山陽道は太宰府へ通ずる路であるといふので、特に重要な道路とせられたのである。これは備中の國から今日の深安郡道土に入り、蘆品郡驛家府中、御調郡宇津戸、豊田郡高坂、下北方、賀茂郡莊野、西高屋、寺西、川上、安藝郡中野、畑賀、府中、安佐郡伴佐、伯郡八幡、平良、大野、小方を過ぎて、周防の國に通じてゐた。其の後江戸時代になつてから、大體今の國道の位置をとつたものである。

我が國に始めて鐵道が敷設せられたのは明治五年のこと、品川横濱間であつた。本縣に鐵道の敷設されたのは、それよりおくれ

ること十九年、即ち明治二十四年九月始めて岡山縣笠岡から福山に通じた時である。是より次第に西方に進み十月には尾道まで、翌年七月には糸崎まで達した。そして二年後の明治二十七年六月廣島まで開通した。廣島以西徳山までの開通は明治三十年五月であつた。

其の後大正十一年複線工事を完成し、今日では日本に於ける重要な幹線をなすに至つたの



廣島縣陸上交通圖

である。
其の後多くの支線も出来て、縣下の鐵道交通はいよ／＼至便になつた。

縣道は縣内に到る所道路網を形成し、其の總延長は三千餘軒に及び、又本縣下で使用されてゐる自動車數は二千臺に達してゐる。

第十一 人造絹絲

今から凡そ二百年ばかり前、フランスにレオミユールといふ昆蟲學者があつた。彼は蠶がその體內にある粘り液を、吐絲口から空氣中に出して絲にすることに常に多大の興味をもつてゐたが、つひに樹脂液か漆の汁かを細孔から押し出してかたまらせると、絹絲のやうな纖維を人造し得るとその著書に發表した。しかしそ

の當時は、誰一人としてこの考をかへりみる者はなかつたが、今日の人造絹絲研究の緒は、全くこの昆蟲學者によつて興へられたものである。それから一世紀の後、硝化綿が發明され、ついでこれを原料として工業的に人造絹絲を造ることが、また佛國人によつて研究された。しかし、この貴重な發明も幾多の缺點を有し、實用としては價值が少いので、種々他の方法が案出されるに至つた。そして現在ではいはゆるヴィスコース法が發明されて、これが全く他の方法を壓倒してゐる。

この方法について次にその大要を述べよう。

人造絹絲はどの方法でも、木材の纖維或は綿花を溶かして粘り液とし、之を細い孔から押し出したまらせて絲にするのである。その粘り液には種々あるが、ヴィスコースといふ液を用ひたものをヴィスコース式人造絹絲といふ。

人造絹絲の製法には、ヴィスコース法より外に、醋酸纖維素法も研究されてゐる。

ヴェイスコースの製造は、纖維素を苛性ソーダの溶液に浸し、これを十分に吸ひ込んだ時、壓搾器にかけて搾り、アルカリ纖維素となし次に粉碎機に移すのである。

粉碎機には互に反對に廻轉してかみ合ふやうになつた羽根がついてゐて、これで固い塊になつたアルカリ纖維素をほぐするのである。これを數時間貯藏した後、二硫化炭素を作用させて、更に再び稀い苛性ソーダ液に溶かしてヴェイスコースを作るのである。

このヴェイスコースを一週間位一定の溫度に保つて置く。之を熟成といふ。熟成を終つたものは、濾過して不純物を去り、貯槽に貯へ、ポンプによつて紡絲機に送る。この機械には極めて細かい孔のある口金がついてゐて、その口金毎に小さいポンプと濾過器とを有してゐる。紡絲機に送られたヴェイスコースは、更にこの小さいポンプによつて蠟燭の形をした濾過器を通り、紡絲管から口金

の細孔を通して凝固液の中へ噴き出されて始めて絲となる。

此の絲は塩類や硫黄のために黄褐色のきたない色をしてゐるので、これを水洗したり漂白したり乾燥したりして始めて美麗な光澤のある人造絹絲が出来上る。

今日では我が國の人絹工業は一躍世界最高の生産高を示すに至つた。これ全く、技術の優秀、生産費の低廉等に基いてゐる。尙現在では遠くカナダ、アメリカ合衆國方面から多額の原料パルプを輸入してゐるが、今後は樺太及び滿洲國北部の大密林から其の供給が計畫されてゐるので、人造絹絲工業は益々發展するであらう。

水利水質に恵まれ、原料動力の供給をうけるにも好位置にある我が廣島縣に、多くの大人絹工場を建設せらるゝに至つたのは當然のことである。廣島、三原の工場はその生産額品質に於て全國屈指のものである。郷土としては勿論、國家としてもまことに工業界の前

途に一段の光彩を添へるものである。

第十二 阿部 正弘

久松城は福山城の別名

久松城頭に東面して聳える銅像は福山藩主阿部正弘の英姿である。

正弘は年二十五で老中となり、終生天下の政治を行つた。

當時は外交が次第に困難となつたので、彼の苦心は一通りてなかつた。攘夷を主張する大名も多かつたが、正弘は時勢を考へ、攘夷を押通すことは國を不幸にするものであると信じて、ペリーが再び來た時これと和親條約を結ぶに盡力した。しかも一方では國防の必要を認めて、秀忠以來二百五十年間禁ぜられてゐた大船の製造を許し、苦しい財政から軍艦汽船を買入れて海軍の基をつく



阿部正弘銅像

にあることは、一身の安全でないとは忠告した。正弘はこの國家多難の時、一身の安全を圖るのは眞の男子でない。自分のもとより一命を投げ出してゐるのである。と答へたといふことである。正弘は安政四年、三十九歳で世を終るまでほとんど江戸にゐたのであるが、藩政にも心を用ひて、自ら質素儉約の手本を示し、文武の修業をさせるために誠之館を建てるなど大いに努力した。賞罰を

つた。又そのとき鳥津藩主の申出をいれて、日の丸を日本の旗ときめた。かつて或人が道眞の例をひいて、正弘が年若くして老中

行ふ時にも、賞の場合は直ぐ許したが、罰の場合は幾度も役人に調べさせ、後やつと許可したといふことである。
このやうに國事に藩治に功勞のあつた從三位阿部伊勢守正弘は實に開港の恩人であり郷土の誇とする偉人である。

第十三 移民王國廣島縣

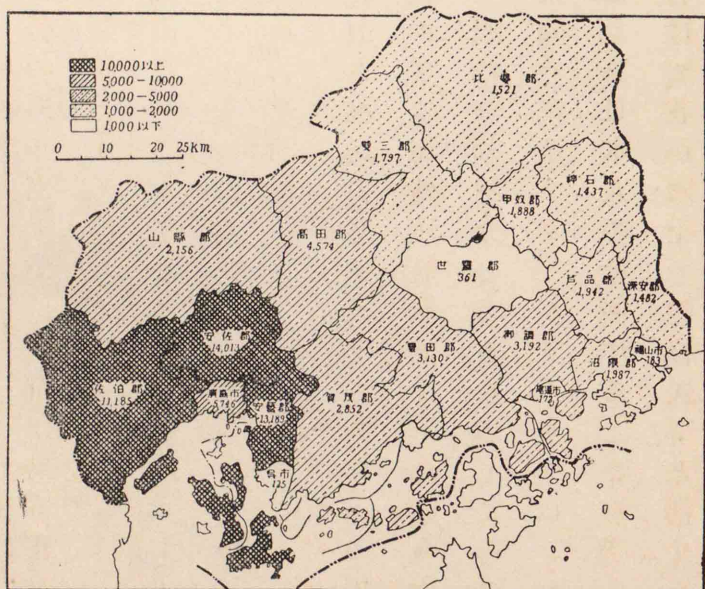
廣島縣の大きな特色の一は海外移民の多いことであらう。昭和五年の國勢調査によると、我が國の海外渡航者五十一萬餘人中、廣島縣人は七萬一千餘人で、全國の一割四分の多きを示してゐる。その渡航地も、アメリカ合衆國・ハワイ・ブラジル・フィリピン・カナダ・ペルー・支那等二十餘國に及び、日本人の發展するところ廣島縣人を見ないとこころはない有様で、我が國第一の移民縣と稱せられ

昭和九年末の調査によれば在留者數は左の通りである
米 國 二万三千
ハ ワ イ 二万六千
ブ ラ ジ ル 一万一千
フ イ リ ピ ン 三千
カ ナ ダ 二千

我が縣の耕地段別
一戸當り五段六畝
歩、全國平均は一
町一段歩である。

るまでになつてゐる。

廣島縣は人口百七十萬人、口密度一方籽二百二人に當り、域内は到る處丘陵が起伏して平地に乏しく、人口に比して耕地の面積が非常に少いことが、夙に縣民の海外發展を促す原因となつた。加ふるに、成功しなれば故郷に歸らぬといふ精神と當局の渡航奨励と相俟つて、今日のやうな地位を占めるに至つたのである。渡航者の多い地方は、一萬四千の移民を送つてゐる安佐郡を首位



圖布分民移外海縣島廣

として、安藝郡佐伯郡・廣島市がこれに次いでゐる。

第十四 工業試験場

我が廣島縣には廣島市と福山市の二ヶ所に工業試験場がある。工業試験場は言ふまでもなく工業の進歩をはかる爲に設けられたものである。即ち

- 一、今までたくさん造り出されて、名高くなつてゐるものをもつとよいものにするための工夫研究
 - 二、將來この地方で製造すれば、きつとよく賣れるだらうと思はれるものの上質な造り方の研究
 - 三、苦心しても製法のわからない人に對する指導
- 廣島縣で工業の最も盛なのは、何といつても廣島市と福山市を中

心とする二つの地方である。これ等の地方では大體造る品物がそれ／＼異つてゐる。工業試験場がこの二箇所に設けられてゐるわけが自ら分ることだらう。

廣島市及び吳市を中心とする地方では、人造絹絲、指物、菓子類、ゴム製品、罐詰^{かんづめ}、金ペン及び万年筆、針、清涼飲料水等が多く造り出されるので、廣島工業試験場では主に化學工業、食品染織等に關する試験研究がなされてゐる。

福山市を中心とする地方で造られてゐるものでは、綿絲、紡績、綿織物、生絲、疊表、染料等がその主なものである。中でも綿織物の備後耕疊表の備後表は共に天下に聞えてゐる。だから福山工業試験場では大體これ等のことについての研究をしてゐる。

このやうに工業試験場がある爲に、色々の工業は日々進歩して行くのである。

第十五藩 校

一 修道館

廣島の藩校は、享保の頃藩主淺野吉長が、藩士及びその子弟の武術練磨場であつた白島稽古屋敷の一部を割いて學館にあて、講學所と稱したのに始まる。後講學館と改め、廣島藩の文教は漸く興らんとするに至つた。

然るに藩の財政が困難となつたため間もなく廢止せられたが、四十年の後、英主重晟は先代の志をついで、城内二の丸に再び學問所を創立した。今を去る百四十年前である。學問所は東學と西學とに別れ、學問もそれく異つてゐた。又聖廟を設けて「大成」の額をかゝげ、公が親しく「至聖先師孔子神位」と書いたものを安置し、諸生をして常に禮拜せしめた。後に東學を松舎、西學を竹舎と改稱

した。

文久三年學問所内に寄宿寮を設け、慶應三年更に皇學所を置いて古事記の講義をした。文久慶應年間、藝藩士にして尊王の大義を唱へ、勤王に奔走した志士の中には、この皇學所に教をうけた者が多かつた。

明治元年藩校を擴張し、寄宿寮を八丁馬場に移し、更に同二年賀茂郡志和村に文武塾を開設し、三百人を派遣し、純朴なる田園生活の中に修學させた。翌年この文武塾は八丁馬場に復し、修道館と改められた。後皇學所をこれに合併し、皇學、漢學、洋學、醫學等を教授したが、學制發布に伴ひ休館された。

其の後淺野長勳は縣下教育機關の備はらざるを慨き、明治十一年私財を以て淺野學校を設立し、修道館の精神を繼承した。爾來大いにこれが發展をはかつたので次第に榮え、同三十八年修道中學

校となり今日に及んだのである。

二 誠之館

今から百五十年の昔、福山藩主阿部正倫は教育普及の必要を感じ、城の西濠近くに藩學を興し、自ら孔子の像を寫して之に授け、毎年開講の際は生徒をして先づ之を拜せしめ、弘道館と名づけて大いに文學武道を獎勵した。

やがて正倫の孫正弘志をついで教育の振興に意を用ひ、老中の劇職にありながら自藩の學制を改革した。

安政元年、執政に向つて、

「人材教育のことは父祖以來深く意を留むる所である。正弘も亦、その遺業をついで文武の道を勵まし、以て君に忠、父祖に孝を致したい所存である。故に大いに藩校を改築し、規模を大にし、學制を改めて文武の講習に便せよ。」

執政とは家柄にか
あはらず、人材を
あげ用ひて政に興
であつたのをいふの
である。

と命じた。

先づ館名を改めんとし、藩の碩學關藤藤陰にはかつて、

「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。」の語を採り、誠之館と命名した。

かくして福山城南の地を選び、宏大な學舎を建設し、水戸齊昭の揮毫になる誠之館の額を玄關に掲げて、修學の指針とした。

翌安政二年正月十六日いよく開講式を擧げたが、子弟の之に列するもの千餘、如何にその盛大なりしか、想像される。

これより年を追ふて修學の美風藩内に満ち、面目益々改まるに至つた。

正弘はこの頃、功勞によつて幕府より一萬石を増されたが、悉くこれを教育資金に充てたのである。

學科目は漢學、和學、洋學、兵學、醫學、禮法、習字、數學、槍術、弓術、馬術、劍術。

柔術・砲術・水練等のあらゆる方面にわたつて居り、天下の碩學達人を集め、以てその教授師範に當らせたから、内容形式共に本邦有数の藩學と稱せられた。明治の御代となり、社會各般の制度が改善されるにつれて、誠之館も幾度か變遷を繰り返してはゐるが、連綿として一貫、誠之の精神を傳へて現在の福山誠之館中學校に及んでゐる。

第十六 島めぐる航路

船頭かはいや音戸の瀬戸で

一丈五尺の櫓がしわる

これは音戸の瀬戸で、急潮になやむ船頭の苦心を歌つたものであるが、たゞに音戸の瀬戸ばかりではない。早瀬三之瀬尾道阿伏兔

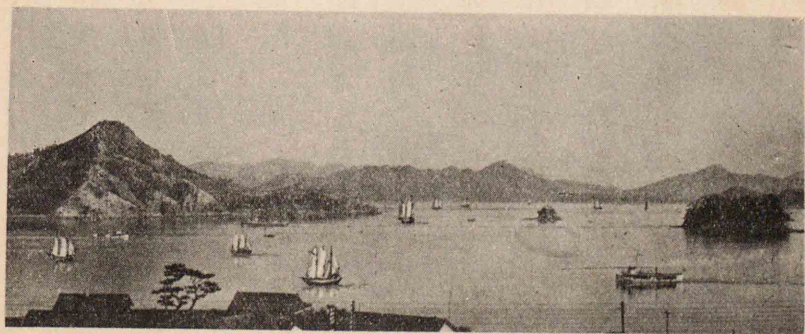
等の瀬戸でも、廣い灘の水が一時に狭い瀬戸に押寄せて恐ろしい急潮となり、尖つた波頭を立て、矢のやうに流れてゐる。こんな所では潮が一方へ流れるだけでなく、兩岸では逆潮を起し、底をもぐつては恐ろしい渦巻を作り、又水面に湧き出では船頭のいはゆる「わい」といふ難所を作つてゐる。

島から島へ、地方から島へ渡る船頭は、先づ船を逆潮に乗せて目的地とは違つた方へだんぐと進んでいく。適當の所まで來ると、今度は急潮を斜に押切つて對岸に着く。だから潮の流を心得てゐないとなか／＼瀬戸は渡れない。大きな帆船が潮を上り得ないで困つてゐる時でも、腕に覚えのある船頭は小舟で巧に瀬戸を抜けていく。此のやうな所では、風を見るよりも潮を待つことが大切になつてくる。そこで何所の瀬戸でも潮待をする船が多い。一度潮が動き始めると、今まで待つてゐた帆船が一時に瀬戸を越

し始める。そのため瀬戸は見る間に帆船
でうまる。

近頃は發動機を備へたポツポ船や、大きな
汽船が帆船の間を縫つて通るやうになつ
た。外国航路や内海航路の優秀船が白鳥
のやうにすべる後を、一ぱい風をはらんだ
帆船がすれくゝに走る。先の船の黒煙が
まだ低くたなびいてゐる中から更に一船
があらはれる。瀬戸の交通は織るやうに
頻繁である。

外国航路の汽船は廣島か尾道糸崎港へ定
期に寄港するのみであるが、ポツポ船は沿
岸の鞆尾道三原忠海竹原阿賀廣島の諸港

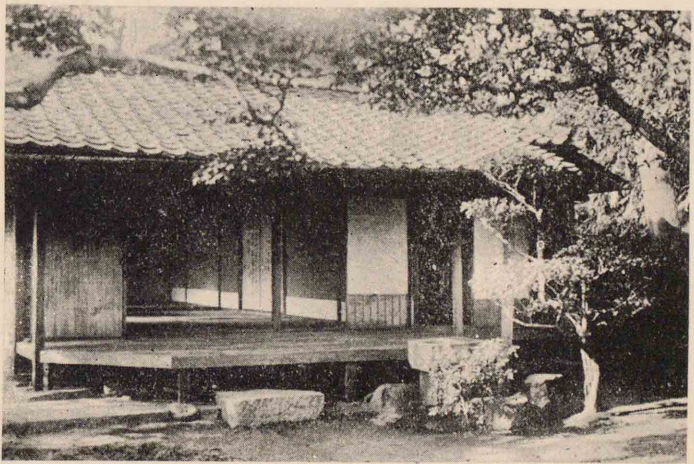


瀬戸越す帆船

を中心として島々の産物を運ぶ。そして其所へ大阪を起點とす
る商船がやつて来て、遠い地方との連絡を圖つてゐる。面白いこ
とにはポツポ船は、大抵其の地方の島の名をとつて大崎丸生口丸
などと呼んでゐるやうである。

第十七 茶山と山陽

廉塾は茶山が子弟を教育した所で、深安郡神邊町にあり、山陽もこ
こで一年餘り學んだことがある。師の茶山は詩においては天下
一、弟子山陽は文章において古今獨歩であつた。廉塾は六疊二間
と八疊一間で、八疊についた裏側の四疊間が山陽の部屋であつ
た。彼の愛用した物干竿がすゝけたまゝ軒下につるしてあり、塾
も今なほ昔の面影を残してゐる。



塾 廉

茶山は學問も深く徳行も厚かつたので、福山藩主をはじめ人々争つて教を請ふた。高山彦九郎も訪れて、尊王の論をたゞかはしてゐる。又山陽の父春水とは、學者仲間として交が深かつた。そこで山陽の不遇時代これを膝下しゅうかにおいて教育したのである。

頼山陽は竹原の人で、忠孝は頼家學問の精神であつた。この家風に育つた青年山陽は、朝廷の御衰微を嘆き、藩則を犯して京に出たが、そのため廣島藩主の怒を蒙つて、國泰寺附近の自家に幽閉ゆうへいされた。その部屋は四疊半の薄暗い

仁室とは山陽の幽閉された室で藩主の寛大な處罪に感じて名づけたのである。

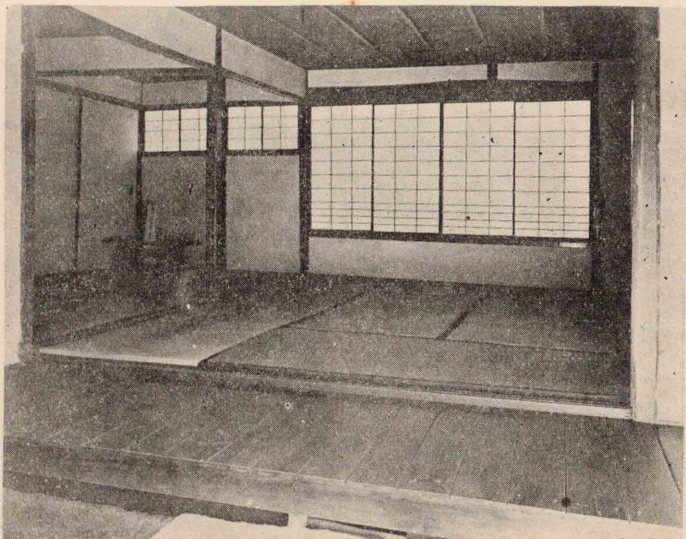
茶山は文正十年年八十で歿す。山陽は天保三年年五十三で歿す。

室で今もそのまゝに存してゐる。

山陽は幽閉五年の間に、悲憤の涙とともに日本外史の稿を作つたのである。斜陽かすかなる舊跡に立つて當時をしのべば、「三十萬言皆血痕こんを帶ぶ」の句切々として胸をうつものがある。

後、茶山の許に迎へられたが三十二歳の春夜に乗じて都へ出た。然しその後幾度も塾を尋ねて師の恩を謝した。

茶山の楠公墓下の詩を誦じやうし、山陽の日本外史を繙ひらくものは、何人も



室 仁

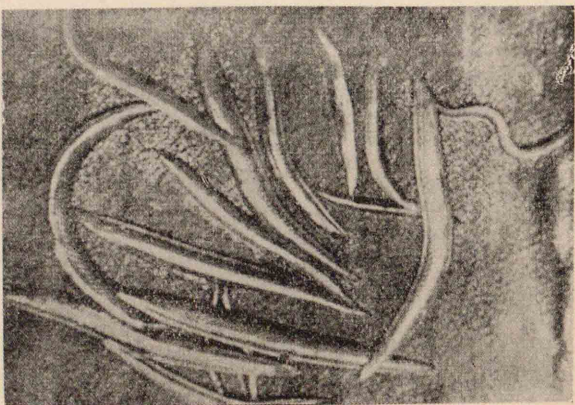
盡忠報國の精神が燃えるのである。茶山も山陽も共に至孝至忠の人であつた。

第十八 なめくぢうを

三吳線安藝幸崎驛に近く、有龍島といふ瓢形ひょうけいの小さい島がある。此所から西南へ約四軒、大久野島に向つて能地堆と呼ばれる砂地が横はつてゐる。此所は満潮の時でも、深い所で七八米に過ぎないから、干潮の時には島から四百米位の一續きの砂地があらはれる。その時砂を少し掘つて見ると、頗る活潑に運動する小さな動物が飛び出すことがある。頭と尾との判然せぬ兩端の尖つた動物である。これをなめくぢうをといふ。殆ど泳ぐことなく時々思ひ出したやうに極めて急激にびんくはねかへるので、うつか

りすると見失ふ。この動物は動物の發生上頗る興味深いものとして、學界では非常に珍重せられてゐる。

なめくぢうをは、その全體の形や、背面に脊索せきさくを持つてゐることや、又鰓えらのあること等から見れば、下等な魚類に似てゐるけれども、腦がなく、内臓の諸器官もすべて簡單で、血液が無色であること等は、魚類と大いに異つてゐる。此の事から魚類の如き脊推動物せきすいどうぶつと下等脊索動物との中間に位し、動物進化の經路を物語るものであることがうなづかれるのである。



なめくぢうを

此の興味深い動物が、彼の砂地に棲息するのは何故であらうか。此の動物は、咽喉部の内面にある繊毛を内方に動かして、絶えず水を口内に吸ひ入れ、主として水中に居る小さな浮游動物を食物とする。だから食物を豊富に得るためには、絶えず新しい海水が移動して來ることが必要である。

幸にも能地堆は全部が花崗岩質の美しい砂から出來てゐて、三原水道を西に流れる下潮と、久能島の北を走る上潮とが晝夜の別無く洲を洗ふ。この急潮にのつて、澄んだ水中を去來する浮游動物はかなり豊富で、なめくぢうをが砂中に體を埋め口部を出して、これを捕食するには最も都合がよいのである。

學問上大いに意義あるこの珍奇な動物は、我々の郷土にのみ棲息して居り、昭和三年天然記念物に指定せられるに至つた。

第十九 宇都宮黙霖

宇都宮黙霖は賀茂郡廣村長濱の人である。幼時は儒佛の書を學んだが、勤王の志を禁ずることが出來ないで、十七歳の時家を出て四十餘國を巡遊し、多くの名僧志士と交つた。

嘉永安政年間、討幕を唱ふるものが次第に多くなり、幕府はこれを捕へんと必死の努力をしてゐた頃、黙霖は萩に至つた。しかし吉田松陰は既に捕へられて獄にあつたので、二人は文書を往復して幕府が政治をすることの誤や、如何にもして我が國を國體の本にかへしたいなど語り合つた。松陰はすべての人に、たとへそれが誤つた考の者でも、必ず勤王の精神を起さしめないでは止まぬといふ心を、黙霖は奸惡な者は大いに筆誅を加へて除かうといふ心をあかして互に勵したのである。時に黙霖は年三十三、松陰より

も六歳の年長であつた。

その後間もなく江戸に往き、大いに勤王の事に働いてゐたが、つひに捕へられた。しかし僧籍にあるの故を以てゆるされることを得た。黙霖は餘程時勢をなげいたものと見えて、文久元年には事の成すべからざるを知り、書をさし出して死を求めてさへゐる。その後も勤王につとめてゐたが、捕へられて廣島藩の獄に投ぜられ、更に幕命によつて大阪に送られた。彼が獄中にある四年の間に、世は明治となり、翌年ゆるされて獄を出たのは四十六歳の春であつた。

明治十年頃故郷長濱に歸つて、さゝやかな家を借り、名利を捨て、きはめて貧しい生活をした。後職を安藝郡役所に奉じて厚く遇せられ、明治三十七年七十四歳で永眠した。さきに明治二十七八年戦役の時、明治天皇のお供申して廣島大

本營に来てゐた伊藤博文が、黙霖を先生と呼んだので、左右の者が驚いたことは有名な話である。又その當時叙位の恩命を受けるべくその履歴を差出すやう御沙汰があつたが、それと知つて遂にこれに應じなかつた。

天恩正三位を授けんと欲したまふ

鐵石の初心何ぞ志を改めんや

半ば死衰せるの翁半生を保つのみ

終身淡白求むるの意なきなり。

詩は實にこの時の心境であつた。

第二十 山地に於ける人々の生活

谷間の雪も春の光に消え失せて、圓い峰低い丘に桃や梨の花が咲

く頃になると、山畠にたつ人の姿がちらほら見え初め、その中には子供も楽しさうに交つてゐる。

やがて谷間に幾十段と打ち續いた可愛らしい田に、父も母も子も一家總出でにぎやかに愉快に田植をする。谷川にかゝる水車小屋からは、のどかなせゝらぎの音に交つて、米や麥をつく物靜かな音がひびいてくる。

暑さ知らずに夏を終り楽しい取入の秋が来る。秋風がすうつと流れると、さわくと音を立て、稲田には黄金の波がゆれる。それも知らぬげにすみきつた空をにらんでゐる案山子、思ひ出したやうに鳴子ががらくとなる。群雀があわて、ばつと逃げる。取入の忙しさは猫の手もかりたいが、一年中の辛苦の結晶を見る嬉しさに、仕事はずんとはかどる。

つや／＼しい粟の實、香のよい松茸をとる頃が過ぎると、野良の仕

事も暇になり、山々はうつすらと白い衣を着る。をちこちの山蔭からは炭焼く煙が靜かに流れ、木々の間に消えて行く。

さら／＼と雨戸をうつ雪の音がして、その後は又一入靜けさが増す。とろ／＼と燃える圍爐裏の傍では、繩をなひながら語る父の言葉に、葉煙草を一枚又一枚と伸ばしゐる祖父も祖母もうれしさうにあひづちをうつて笑聲が起きる。圍爐裏にかけられた大鍋には、牛の飼餌がぶつ／＼と煮えてゐる。外はまた一しきり吹雪らしい。子供は明日銀のスロープをすべる面白さを胸に描きながら、せつせと手製のスキーの手入をしてゐる。こんな人情味豊かな落着いた生活は、大自然の山懷に育てられる山地の人々の外には到底味はへない。

第二十一 辻 將曹

辻將曹は維學ひがくともいひ、淺野家の家臣で、幕末の頃皇事に力を致した人である。

幕府が再度の長州征伐に失敗したので、政權を朝廷に奉還せしめるには最もよい時期であると將曹は考へ、藩主の命を受けて上京し、勤王の大名や家臣を説伏して、遂に大政奉還に關する建議書を將軍に奉るやうになつた。その後幾多の曲折を経て遂に王政復古の大號令が發せられたのである。

殊に彼が最も皇事に盡したのは、いはゆる小御所會議こごしよかいぎであつた。

これは明治新政の方針をお諮りはかになる會議なので、畏くも 明治天皇も臨御りんごあらせられたのである。皇族公卿勤王の諸大名及び家臣の集りて、勿論藝州藩主も將曹も加はつてゐた。たま〜土

佐の山内豊信が前將軍慶喜をも新政に與らせたいと主張したことから、會議は激論の渦を巻き、岩倉具視・島津久光などは眞向から反對して物凄い光景となつた。會議は一時中止され、西郷隆盛の如きは「山内殿、論を改めずんば、たゞこれあるのみ」と密かに腰の刀を撫なした程であつた。

御所のあたりは、各藩の志士が會議の成行を心配して、物凄い不氣味みさをたゞよはせてゐた。若しこのまゝに物別れとなつては、それこそ日本の一大事である。將曹は土佐の後藤象次郎を説いて、次の會議には山内公が前言を再び主張しないことにさせ、さしものに殺氣だつてゐた會議を無事に終らせた。

後、復古功臣三十餘人の中に數へられ、正四位男爵を賜はつた。今は廣島市材木町の誓願寺に靜かに眠つてゐる。

第二十二 淺野長勳侯

淺野長勳侯は元廣島藩主である。侯は少年の頃から文武の道にいそしみ、雷雨のはげしい日でさへ師の許に通ふことをやめなかつた。青年の頃は、幕末から明治維新へかけての随分あはたゞしい時代であつたが、侯はつとに心を皇事にいたし、辻將曹等勤王の武士を重用して、王政復古のために日夜心を碎き東奔西走大に努力した。

大政奉還の後新政の方針を定め給ふ小御所會議に與つては、赤誠を以て大業を扶翼した。

爾來、明治天皇の側近に奉仕して、或は議定ぎぎていに、或は元老院議官等に任ぜられたが、天皇の御信任は殊の外厚く御乗馬の御相手を仰せつけられたことも度々であつた。又藩知事であつた頃、一日宮

中の御内儀に召されて御宴にあづかつたが、大帝は屢々御座を立たせられ、御手づから御酒を賜はつた。或は又侯の私邸に行幸遊ばされて、種々の御催しに打興うちきようじ給ひつゝ、深更に至るまで時を過させられたこともあつた。後從一位勳一等を賜はり臣下として無上の光榮に浴した。

第一回長州征伐の行はれんとした時、長州は英米の諸外國から下關を攻撃されてゐたので、今征長の軍を進めれば、外國の力を借つて長州を挾撃けつげきし、之を滅すことになるかと考へて、外國船の退くまで出兵の延期すべきことを建白した。この非凡な識見は現今の學者の齊しく嘆賞するところである。

老侯は常に國家の爲「身命を捧げて惜しまない」といふ信念で一貫した。老を顧みずはる／＼筑紫に旅立ち、國難克服を管崎宮むらさきみやに祈つたのも、全くこの精神のあらはれである。

侯は既に九十歳を越えてゐるが、尙紅顔、威嚴と慈愛の情が言語にもあらはれ出て、對坐の人をして自ら襟を正さしめる。長壽の法を尋ねる人々にむかつては「人の生死は天命ではないか。いはゆる死生命有りぢや。くよくと死を恐れたつて、人の力では如何とも出来ぬではないか。だが養生は大切であるから、よく氣をつけねばならぬ」と答へる。短い言葉だがなかくに味ひつくされない意味がある。老侯は今でも、朝八時に起床し、夜は九時頃必ず床につき、晝は運動と勉強とを怠らない。漢書を読み、折にふれては詩をつくるとのことである。

侯は平素、人は隠居する程つまらぬことはない。年はいくらとつても、息の通ふ間は御國の爲に盡さなくてはならない。」と語るが、この一語にも侯の忠誠であることがよくしのばれる。

第二十三 いかり漁業

豊田郡の南端、安藝灘の渦巻く潮の中程に、豊島、齋島、尾久比島などの島々が點在してゐる。此の附近一帯は、人と鳥と魚との關係が、面白く展開するいかり漁業の行はれる所である。いかりとはこの邊の潮が渦巻くのをいひ、その場所での漁業をいかり漁業といふのである。

毎年節分頃になると、此の邊一帯の海面に、家鴨あひ鴨に似たあびといふ水鳥が澤山浮遊し始める。此の鳥は北極近くの寒い地方から、はるく、いかなごを求めて此の地方に来るのである。漁夫達はこれをみると、すぐ仕事の支度にとりかゝる。追ひ廻すあびの恐しさに堪へかねたいかなごの群は、水の底へ逃げる。すると下の方では、こゝぞとばかり鯛やすゞきが待ち構へてゐるので、また海面



業漁りかいとびあ

へ浮ぶといふやうに逃げ惑ふ。常には深い海底に棲むこれ等の魚も、いかなどを追ふて思はず浮き上つて来る。そこでいかなどは上下からはさみ討にせられる。魚がにげる、船が進む、鳥が泳ぐ、そのあはただしい中に漁夫達は手早く釣を下して、水面近くを泳いでゐる鯛やすきを釣り上げ、逃げ廻るいかなどを網ですくひ取る。見る間にたくさんの獲物が盛られて行く。全く鳥なくしては行へない漁業である。漁夫達があびを愛し保護すること

漁夫が誤つてあびを釣針にかけ死なすやうなことがあれば、室原神社に詣でて死骸を捧げ、後寺に葬り冥福を祈る。

は想像以上である。又あびも漁夫達によくなつて少しも恐れない。若し服装の異なるものが船にゐると遠くへ逃げて中々近寄らない。毎年鳥祭いかり祭が村人達によつて行はれるのも、鳥に對する感謝の念のあらはれに外ならない。あびも亦、最も安全なしかも食物の多いこの土地に時をたがへずはるく飛んで来る。かうして人と鳥とが共々に助け合つて働いてゐるのは實に面白いことである。この海面と、鳥とが、天然記念物として保護されてゐるのも當然である。

第二十四 縣 民 性

北は丘陵起伏する中國山脈を負ひ、南は風光繪の如き瀬戸内海に臨んでゐる我が廣島縣は、氣候溫和、土地亦豊饒で、大自然の恩恵を

うけてゐることがなかく多い。このなごやかな自然の中に生ひ立つ百七十餘萬の縣民は、性質溫順で平和を愛し、快活無邪氣な氣風を具へてゐる。

かつては毛利氏の治下に屬し、やがて淺野氏や阿部氏が代るに及んだが、これらの藩主はよく領民を愛撫し施政宜しきを得たので、領民は平和な生活を樂んで來た。かゝる歴史も亦縣民にやさしい性質と隣保互助の良風を育むことに與つて力があつた。

我が廣島縣ほど恵まれた自然と、平和な歴史とを有する縣は全國でも少いであらう。隨つて、それだけ縣民にも優れた數多の良性美德が自ら具はるに至つたのである。けれどもその反面には、また幾多の短所缺點の潜んでゐることを自覺しなければならぬ。岸を嚙む怒濤に親しむ土佐人や、雲にそびゆる峻峰を望む信州の人達に見る潑刺たる剛毅の氣象、不撓不屈の精神には缺けてゐる

やうである。廣島縣が地震津浪などの自然の脅威を受けること少なく、陸に海に天與の物資を豊に恵まれてゐることは、まことに幸福ではあるが、然し一面とかく郷土に安住して安易な生活を貪り、遊惰に流れ、小成に安んじて保守退嬰を事とするやうにもなり易い。この點は深くいましめなければならぬことである。

由來我が縣民は、海外各地に出稼して活躍することに於ては、他府縣人に決して劣つてはゐない。けれども、出稼する人の多くは、やがて故郷を慕つて歸り、貯へた金で安樂な餘生を送らうとする。これでは眞の海外雄飛とはいへない。一旦故郷を出た以上人間到る所青山在りの意氣を以て、骨をその地に埋める覺悟で大いに活動しなければならぬ。

今後我々は、大いに修養に努め、深く自省して長所を伸ばし短所を補ひ、郷土のため延いては國家のために貢獻する人物とならねば

ならぬ。

(廣島縣郷土史年表)

天皇	紀元	時代	國史上の人物・事件	郷土の人物・事件
天照大神	一	神代	神武天皇御即位、紀元元年	神武天皇が埃宮・備後高島によられた
神武	一〇〇	大和		
	二〇〇			
	三〇〇			
	四〇〇			
	五〇〇			吉備津彦命を將軍として山陽道につかはされた
崇神	六〇〇			
景行	七〇〇		日本武尊が熊襲をお討ちになった	
	八〇〇			
仲哀	九〇〇		神功皇后が新羅をお討ちになった (へん)	神功皇后が鞆や、糸崎、草津によられた
欽明	一〇〇〇		代	
	一一〇〇			
	一二〇〇	はじめて佛教が傳はつた		

今二六〇〇	大二三	明二五〇〇	孝二二四〇〇	光二一九〇〇	後二一三〇〇	後一〇九	後一〇七	後一〇六	後一〇五	後九六	後九二	仲八五	後八二	近七六	桓五〇	稱四八	聖四五	元四三	孝三六	推三三	欽二九
上正	治明	格	西正	成町	御門	山	山	多	多	多	多	恭	羽	衛	武	德武	明	德	古	明	
二六〇〇	二五〇〇	二四〇〇	二三〇〇	二二〇〇	二一〇〇	二〇〇〇	一九〇〇	一八〇〇	一七〇〇	一六〇〇	一五〇〇	一四〇〇	一三〇〇	一二〇〇	一一〇〇						
代時京東	代時戶江	代時國戰	代時野吉	代時倉録	代時安平	代時良奈															
幕府が合衆國と通商條約を結んだ (二五二八) 慶喜が大政を奉還した (二五七) 帝國憲法を御發布になった 日清戦役・日露戦役 歐洲大戰 國際聯盟脱退	本居宣長が古事記傳を作り上げた 幕府が長州を討つた 慶喜が大政を奉還した (二五七) 幕府が合衆國と通商條約を結んだ (二五二八)	足利將軍がほろんだ (二三三) 秀吉が北條氏を滅して全國を定めた (二三〇) 關ヶ原の戦 (二二六) 家康が征夷大將軍に任ぜられた (二二六) 島原亂 徳川光圀が大日本史編纂をはじめた	應仁の亂がはじまった (二二七) 天皇が京都におかへりになった (二〇五)	元が攻めて来た 天皇が政權をお取りもどしなされた (一九九) 建武中興 天皇が京都におかへりになった (二〇五)	源頼朝が征夷大將軍に任ぜられた (一八五) 承久の變 元が攻めて来た 天皇が政權をお取りもどしなされた (一九九) 建武中興	はじめて佛教が傳はつた 聖徳太子が十七條の憲法をお定めになり、又、支那に使 おやりになった 大化の新政がはじまった (一三五) 天皇が奈良の都をおたてになった (一三〇) 天皇が國ごとに國分寺をお造らせになった 清鷹が宇佐八幡の教を申しあげた 天皇が平安京をおたてになった (一四四)	備後安藝兩國分寺を建てられた 廣虫が備後に流された (御調八幡宮) 弘法大師が明王院、福王寺、彌山等を開いた	平清盛が安藝守となり、後嚴島神社を再建した	櫻山茲俊が義兵を擧げた 石井末忠が船上山に參り、後湊川で忠死した	毛利元就が陶晴賢をほろぼした (嚴島の戦) 小早川隆景が三原城を築いた 福島正則が廣島城主となった 淺野長晟が廣島城主となった 水野勝成が福山城を築いた	阿部正邦が福山城主となった 淺野吉長が藩校を開いた 柳屋又七が海苔の製法を考案した 唐崎赤齋が自刃した 木原松桂が母を尋ねた 菅茶山が死んだ (八〇歳) 頼山陽が死んだ (五三歳) 阿部正弘老中となり、誠之館を開いた 富田久三郎が備後緋を考へてつくつた 辻將曹 宇都宮黙齋 下瀬博士										

昭和十年七月五日印刷
昭和十年七月十日發行

不許複製



郷土讀本(上中下各)

定價 金拾八錢

著者 廣島縣教育會

發行者 廣島市堀川町七十六番地
丸岡才吉

印刷者 廣島市堀川町六十三番地
丸岡政造

發行所

廣島市堀川町

會社名 廣

文館

電話一七七一・一七二四番
振替大阪二二五三七番

最新兒童學習參考書

安田百助著	受驗 補習	二行式實力算術	定價七拾錢
田邊日出男著	受驗 合格	統計讀方の總仕上げ	定價六拾錢
檜高憲三著	必 格 出 來 る	學 習 算 術	定價七拾五錢
木田義登著		分類式力の算術	定價參拾錢
竹澤丹一編		小學書方學習帖 <small>一尋—高二</small>	定價各拾錢
廣島縣教育會著		郷土讀本 <small>(上,中,下)</small>	定價各拾八錢
廣島縣教育會著		廣島縣地理	定價拾七錢
廣島縣教育會著	新 定	珠算教科書	定價拾五錢

發行所 廣島市堀川町
振替大阪二二五三七番 廣文館

廣島縣全圖



鐵道未開區
進成
省界
1:600 000
10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150 160 170 180 190 200

廣島縣全圖



六號電報線國縣
道城
入省車線邊界界
1:600 000
5 0 5 10 15 町



広島大学図書

2000302825

